

磯崎新の身体観——舞踏から空中浮遊へ
松井茂
情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

建築家の磯崎新(1931~2022年)は、1978年に Festival d'Automne à Paris の依頼に応じて、Musée des Arts Décoratifs において、「Exposition MA Espace-Temps au Japon 間展 日本の時間空間」(会期:1978年10月12日~12月11日)をキュレーションし、国際的な注目を集める。好評につき、翌1979年1月8日まで会期は延長された。間展から派生した、「間」をめぐる議論は、磯崎の後半生50年にわたる主題となり、特に1990年代には、デリダがプラトンの『ティマイオス』から展開した「コーラ」に関係づけられて「間」を論じるなど、2019年のプリツカー賞受賞理由のひとつにも挙がることになる。しかしながら、磯崎が継続した議論は、展覧会を契機に執筆されたテキストを深化させたものであり、その意義は、展覧会が注目を集めた論点とはかけ離れたものとなっているだろう。本発表では、間展の実際を明らかにし、その特徴として話題を呼んだパフォーマンスに注目することを通じて、磯崎がキュレーションした身体観を検討する。

間展は、「道行 みちゆき」「数寄 すき」「闇 やみ」「神籬 ひもろぎ」「橋 はし」「移 うつろひ」「寂 さび」の7部屋と「プロローグ」「エピローグ」をあわせた9部屋で構成された。各部屋は、ジョセフ・コースス《One and Three Chairs》(1965年)をリファレンスにデザインされ、Subject、Object、Imageの並置でその部屋のコンセプトの説明が意図された。Subjectとしては、磯崎による説明文が掲示。Objectとして、倉俣史朗、宮脇愛子、高松次郎らの現代美術、あるいは茶室(中村外二)、能舞台、伊勢神宮など伝統的な建造物の模型を設置。Imageには、篠山紀信、山田脩二、二川幸夫の写真、磯崎による廃墟のカラーージュ、浮世絵などを展示した。グラフィックデザインは杉浦康平、コンセプトブックの編集は松岡正剛。これらの作家の名前を列挙してわかるように、各部屋の主題が、和語に基づく古典的な価値観を説明することを意図した単語ではあるものの、いわゆる戦後日本美術によってこれを説明しようとした挑戦的な展覧会であった。規模は小ぶりではあるものの、戦後日本美術がフィーチャーされた展覧会としては、1986年にポンピドゥー・センターで開催される「Japon des avant gardes 1910-1970」前衛芸術の日本1910-1970展に先がけた、早い試みでもあった。本展には、

戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチン化をはかった性格があり、背景には、磯崎が原風景として捉える1945年8月15日という時空間が予感される(松井茂「間展再考——戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチン化」第75回美学会全国大会2024年10月14日美学会)。

本発表では、パフォーマンスを上演する能舞台が設置された「闇 やみ」の展示室について検討する。Imageとして、能舞台の羽目板に鏡面を設置。能舞台奥の羽目板には老松を描き、これを「鏡板」と呼ぶ習慣を逆手にとった、脱構築的な設計だ。床面にもアルミパネルを使用。反射する素材の多用は、磯崎が1964年に発表した論文「闇の空間 イリュージョンの空間構造」の実践だ。この舞台を使用したライブ・パフォーマンスが会期中ほぼ連日行われたことは、展覧会史の観点から異例であり、本展本来の注目の論点である。

資料に基づく、10月11日~23日の13時と17時に、土方巽の振付による芦川羊子の暗黒舞踏「ループル宮の十四晩」(「半分かぐや二態」「夜桜姫二態」「ほうき姫」「白児姫二態」「おまけ姫二態」「灰姫」「長壁姫」「バック姫」)。10月25日~11月13日の同時刻に田中泯の「ハイパーダンス」。11月22日~12月4日の同時刻に鈴木忠志の演出による白石加代子の「死の影」が演じられた。

音楽のパフォーマンスも行われた。10月11日~23日の15時に、延暦寺の声明。11月15日~11月20日の同時刻に鶴田錦史(琵琶)横山勝也(尺八)。11月29日~12月4日の同時刻に富山清琴(箏曲)。11月29~12月4日の13時、12月6日~11日の15時に、小杉武久、鈴木昭夫によるインプロヴィゼーション。延長した会期には、小杉、鈴木のパフォーマンスが行われたようだ。

鈴木は、1972年以来フランスで高い評価を得て毎年公演を重ねていた。小杉は1977年からマース・カニングハム舞踊団の専属作曲家として活躍していた。これに比して、土方(芦川)と田中のパフォーマンスは、本展を通じて大きな衝撃をフランスに引き起こす(宮川「舞踏の受容と間——〈間〉日本の時空間展を中心に」舞踊学会第63回大会2011年12月。パジェス『欲望と誤解の舞踏』慶應義塾大学出版会2017年等)。本論では上記の間展のパフォーマンスに関する調査に基づいて、これを磯崎の主要な空間論である「闇の空間」の実践として検証する。

その展開として、1962年に土方と小杉も参加した磯崎邸でのハプニングと、2000年に第7回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展で発表したインスタレーション「憑依都市」における、ヨガの行者による「空中浮遊」のパフォーマンスとの接点を論じ、磯崎新の身体観に対して、建築外からアプローチする試みとなる。